

## サモアにおける 無形文化遺産の現状と展望

**背景** サモア（サモア独立国）は南太平洋に浮かぶ面積2,830km<sup>2</sup>、人口188,900人（2012年）の島嶼国である。地理的には大洋州のポリネシア地域に属する。日本ではNHK「みんなのうた」で紹介された「サモア島の歌」の舞台として良く知られているが、このような民謡のみならず、舞踊や口承伝承、手工芸や入墨の技術、特徴的な壁のない家屋など、伝統的なポリネシア文化をよく保持しており、それらはとりわけ無形文化遺産にカテゴライズされるものが多い。

2013年11月にサモアはユネスコ無形文化遺産条約を批准し、大洋州においては8番目の条約批准国となった。しかし現段階では無形文化遺産一覧表に登録された物件は未だなく、同国においては無形文化遺産の保存・活用に向けた仕組みづくりが急務となっている。その中で特に重視されているのが、一覧表登録に申請する物件を選定することと、遺産の保存・活用の拠点として、現在あるサモア国立博物館を改修し、「サモア文化センター」を発足させることである。

こうした状況を受けて、サモア政府教育・スポーツ・文化省およびユネスコ大洋州事務所は、文化遺産の保存・活用について豊富な経験をもつ日本に、助言と協力を要請した。それを受けて2014年2月に、文化庁「平成25年度博物館・美術館相互交流事業」において、奈良文化財研究所から筆者がサモアに派遣され、サモア政府教育・スポーツ・文化省およびユネスコ大洋州事務所が主催する会議「Consultation on the Development of Samoa Culture Centre」に参加し、専門的な助言をおこなった<sup>1)</sup>。さらに、2014年10月には、文化庁「平成26年度外国人芸術家・文化財専門家招へい事業」において、サモア政府教育・スポーツ・文化省大臣で無形文化遺産条約担当大臣のマゲレ・マウイリウ・マゲレ (Magele Mauiliu Magele) 氏を奈良文化財研究所へ招き、日本の文化遺産の保存・活用の現状を視察してもらうとともに、文化庁や国際協力機構 (JICA)、東京文化財研究所や国立民族学博物館などの機関を訪問し、また様々な専門家との意見交換を果たした (図33)。

このように、同国の我が国に対する期待は大きく、今



図33 サモア・マゲレ大臣と青柳正規文化庁長官との面会

後我が国による文化的国際協力の有力な候補地となることは疑いえないだろう。こうしたことを踏まえ、以下ではサモアにおける無形文化遺産の現状と展望について考察したい。

**無形文化遺産としてのファインマット** 現在サモアが無形文化遺産一覧表への登録第一号を目指している物件がファインマットである。ファインマットはパンダナスの葉を細かく裂いたものを編み上げたゴザの一種であるが、とりわけ目地が細かいものがファインマットと呼ばれる (図34)。通常のゴザは目地の幅が10mm程度であるが、ファインマットには2mm以下のものもあり、その製作には数カ月から一年もかかり、しかもすべて手作業である。ファインマットはサモアの伝統文化において交換財とみなされており、とりわけ婚礼や葬儀などにもなう大規模な儀礼交換 (ファアラベラベ) において不可欠な財となる<sup>2)</sup>。

無形文化遺産としてのファインマットの価値は、その見た目の美しさや、その巧みな製作技術のみならず、その文化的・歴史的な価値、とりわけサモア文化において重要な儀礼と深く結びついていることによるといえる。しかし近年では、このファインマットの無形文化遺産としての価値が危機に瀕する状況におちいつている。それは、現金経済の浸透により、伝統的な交換財としての役割に変化が生じたからである。しかし大方の予想に反して、現金経済の浸透はファインマットの需要を減らすのではなく、むしろ増やす方向に作用した。以下、その背景を述べることにしたい。

島嶼国であるサモアは資源・人口・経済のいずれも小規模であり、現金収入に乏しいことから、第二次世界大戦後に海外移民が急増し、今では現金収入の多くを海外移民からの送金に依存するようになってきている。それとともに現金経済が浸透し、儀礼交換の場であるファアラベラベにおいても現金の交換が盛んになされるようになった。

伝統的なファアラベラベにおいては、トガ財 (女性財)



図34 ファインマットと首長たち<sup>3)</sup>

と呼ばれるファインマットと、オロア財（男性財）と呼ばれるブタ・タロイモなどの食料や道具類とがそれぞれ交換されていたが、現在ではオロア財として現金が用いられるようになった。そのため、大量に流入した現金と交換する対価として、大量のファインマットが必要とされるようになった。

このような背景でファインマットの需要が高まり、大量に生産されるとともにその粗悪化が進行した。これまで数か月から一年もかかって作られたものが数日で作られるようになり、著しい質の低下を招いたのである。

しかしこうした流れを止めるべく、近年では政府が粗悪品のファインマットの使用を止めるよう呼びかけ、少数の良質のファインマットだけが流通するような流れへと変化してきている<sup>4)</sup>。

現金経済の浸透が、伝統的な文化の価値体系を毀損してしまう事例は世界中にみとめられるが、サモアの事例では、むしろ伝統的な文化の価値体系を（望まない形で）エスカレートさせてしまった点で注目すべきであり、ある意味で「負のグローカル化」とも評価できるであろう。

**持続可能な無形文化遺産を目指して** 無形文化遺産の保存・活用という観点からこのファインマットの事例を見たとき、それを持続可能なものにならしめるためには、その無形文化遺産を取り巻く環境的・経済的・社会的な条件を考慮し、その条件の下での持続可能な方向性を導き出す必要がある（図35）。

ファインマットの事例では、経済的な条件としては現金経済の浸透が挙げられる。また社会的な条件としては、現金経済の影響により変化してしまった儀礼交換（ファアラベラベ）を挙げることができるだろう。このような条件を考慮すると、ファインマットをかつての伝統的な姿として復元することは不可能であり、時代と共に変化していく条件のもとに、それに適応させていくというのが持続可能な方向性と評価できるだろう。

実際にサモアでは、政府による粗悪品廃止の呼びかけの他にも、NGOによってファインマットを女性の現金収入獲得手段として位置付けていく取り組みがなされるなどの試みがおこなわれている<sup>5)</sup>。ファインマットを無形文

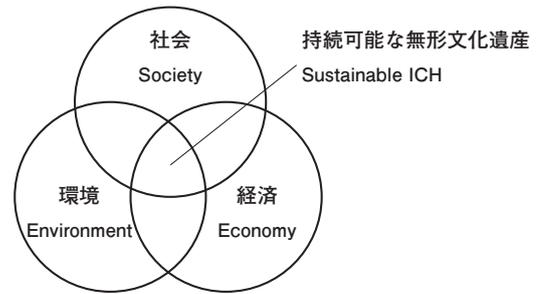


図35 持続可能な無形文化遺産のあり方

化遺産に登録するという試みも、それを国際的な枠組みでとらえて保存・活用しようというものであり、今日のかつ有効な適応の戦略のひとつに位置づけられるだろう。

なおファインマットの事例では、それを取り巻く環境的条件についてはまだ差し迫った状況にはないものの、無形文化遺産全般を考えるにあたっては重要な条件である。ファインマットの原材料であるパンダナスは、現在でも豊富に入手できる環境にあるが、例えばサモアの伝統的な家屋を建てるのに必要な木材の多くは、今日では入手し難くなっている。そしてその背景には、コンクリートなどの現代的素材が導入され、木材の使用が廃れたという社会的条件がある。

このように環境・経済・社会の諸条件はそれぞれ関連しており、それらを包括的に考慮するという視点が必要となる。ひとくちに無形文化遺産を守るといっても、それをフリーズドライのように保存するのではなく、生きている遺産（リビング・ヘリテージ）として残していく方向性を探ることが重要である。（石村 智/東京文化財研究所）

#### 謝辞

本事業を実施する上で、多くの個人・諸機関の多大な協力を得ました。感謝して記します（敬称略・順不同）。マゲレ・マウイリウ・マゲレ（サモア政府教育・スポーツ・文化省大臣）、愛川紀子（元ユネスコ本部文化局）、高橋暁（ユネスコ大洋州事務所）、渋谷一正（サモア駐留日本国大使）、坂本和一（元立命館アジア太平洋大学学長）、山本真鳥（法政大学教授）、倉光ミナ子（天理大学准教授）、原見（元JICA専門員）、国際協力機構（JICA）本部・サモア支所、国立民族学博物館、東京文化財研究所、アジア太平洋無形文化遺産研究センター、文化庁。

#### 註

- 1) UNESCO “Consultation on the Development of Samoa Culture Centre” 2014.
- 2) 山本泰・山本真鳥『儀礼としての経済：サモア社会の贈与・権力・セクシュアリティ』弘文堂、1996。
- 3) Krämer, von Augustin “Die Samoa-Inseln: Entwurf einer Monographie mit besonderer Berücksichtigung Deutsch-Samoas” E. Schewizerbartsche Verlagsbuchhandlung, 1903.
- 4) 山本真鳥「儀礼交換と文化政策：サモアにおけるファインマット復興運動の展開」第30回日本オセアニア学会研究大会 口頭発表、2013。
- 5) 山本真鳥「サモア社会における女性の仕事の復興：市場経済下のジェンダー役割分担の保守と変容」原伸子編『市場とジェンダー：理論・実証・文化』比較経済研究所研究シリーズ20、2005。